

海外の評価がすすむ日本文学

図書館係 阿部健治

世界的に権威がある英国の文学賞「ブッカー賞」の翻訳書部門である「ブッカー国際賞」が8月26日に発表され、日本の作家小川洋子の「密やかな結晶」は最終候補6作品に入っていたが、惜しくも受賞を逃した。ブッカー賞はイギリスの文学賞だが、イスラエルのエルサレム賞やチェコのフランツ・カフカ賞などと並んで、これを受賞すると、次はノーベル文学賞の有力候補になると言われている。日本で最も世界に知られている作家村上春樹は後二者を受賞していることをもって毎回有力候補として挙げられるのだが、2017のノーベル賞選考においては、下馬評に背いて、日系イギリス人作家カズオ・イシグロが受賞した（イシグロは村上と親友であり、イシグロは父も母も日本人なので、彼のノーベル賞受賞が伝えられると、日本では微妙な空気が流れた）。そして彼は、1989に英国貴族邸の老執事が語り手となった『**日の名残り**』（原題：The Remains of the Day）により、35歳の若さで既にブッカー賞を受賞していたのである。イシグロのノーベル賞受賞によってブッカー賞の評価は更に高まった。

カズオ・イシグロの話が出たので、少し彼の作品の話をしたい。イシグロの作品の中で、日本で最も知られているのは2005のブッカー賞で最終候補にもなった（この賞は何度も受賞可能なのだ）『**わたしを離さないで**』（原題：Never Let Me Go）である。この作品はイギリスで映画化・舞台化されたが、日本でも、舞台を日本に移し替え、綾瀬はるか・三浦春馬の主演でテレビドラマ化された（蜷川幸雄演出、多部未華子主演の舞台もあるらしい）。ネタバレするとつまらないので詳しいことは言えないが、この作品はクローンにまつわる哀切きわまりない話で、社会的問題をも提起して大評判になった（宇都宮大学の古い建物が作品の舞台として用いられたことが話題になったりもした）。

しかし、筆者は先述の『日の名残り』の方が好きである。歴史ある洋館（というよりは城と言った方が近い）を取り仕切る老執事の手は、江戸時代の雄藩の家老のそれ（例えば伊達政宗に仕えた片倉小十郎のような）にも通じるものがあり、古き良きものを愛するという心性によって、日本人とイギリス人が深く通じ合えたと思えたからだ。父母ともに日本人であり、幼児期を日本で過ごしたイシグロがブッカー賞を受賞することには、このような大きな意義があったのである。また、この作品は1993に英米合作で、ジェームズ・アイヴォリー監督、アンソニー・ホプキンス主演で映画化されたのだが、この映画が実に素晴らしい。英国の洋館と言っても、小説では想像するしかないが、映画なら、この城とも言える洋館で使われる調度品の一つ一つが実物で示される（しかも磨き抜かれた映像で）。まるで、美術館の中にずっといるような趣で、その中で、ナチスをどうするかという国際会議が開かれたりする（私邸で国際会議というのがすごい!）。各国の代表はこの邸に招かれ、お茶を飲んだり、噂話をしたりしながら駆け引きをする。その間、老執事は粗相がないように、邸のマネージメントに全精力を傾ける。これを主演のアンソニー・ホプキンスが実に見事に演じている。せりふの味わいが伝わりにくい字幕の映画で、演技がうまいと初めて心から思えた。忘れられない映画の一つである。

カズオ・イシグロの作品は図書館に揃っているのです是非読んでみてほしい。

話を小川洋子に戻そう。彼女には多くの作品があり、図書館にも相当数揃っているのだから、とにかく気に入った物を読んでほしいのだが、実は筆者はちょっと彼女が苦手なのである。

小川の作品は超現実的な設定が多い。今回ノミネートされた『密やかな結晶』にしても、主人公が、どんどん記憶が失われていく島（しかも人々がそれに全く気づかない）に一人ぼっちでいるというものだ。今気づいたのだが、こういうところは村上春樹に近いかもしれない。だから、村上春樹が好きな人には小川洋子は合うかもしれない（足女生にはハルキストはいるかな?）。しかし、筆者の読書は年とともに怠惰になってきて、最近の書き手に完全に身を委ねるというスタイルになってしまったので、こういうものに立ち向かうにはエネルギー不足を感じてしまうのだ。足女生諸君は若いのだから、こうした小川洋子的な作品にもチャレンジしてほしいが、ここでは比較的楽に読める本として『博士の愛した数式』を挙げてみる。この作品は**文系に数学の面白さを伝える**という面では右に出るものがない、特別な作品である。作中で「友愛数」（作品を読まない人は、せめてどういう数か調べてね）という聞き慣れない言葉が紹介されるが、何とも素敵なネーミングでそそられる。これで数学に興味を抱いた人も多かったのではないかな。

最近、海外で評価された作品と言えば、2018にエドガー（MWA：アメリカ探偵作家クラブ）賞の翻訳部門にノミネートされた**湊かなえ**の『**贖罪**』である。これも受賞には至らなかったが、とてもつながりそうに見えなかった人物同士が最後につながって事件の全容がわかる構成に新味があり、面白かった。湊かなえは「イヤミス（後味の悪いミステリー）の女王」と呼ばれ、血を見るのを恐れる筆者の肌には合わないとい前に書いたが、著書の他に映画やドラマもいくつか見たことによって、最近はかなり慣れてきた。今でもやはり血が流れるシーンが過剰な気はするが、それがメインなのではなく、人間をしっかりと描こうとしている（『**Nのために**』はよかった）のがわかったので、読み応えを感じるようになった。

エドガー賞では、2004に**桐野夏生**が『**OUT**』で、2012に**東野圭吾**が『**容疑者Xの献身**』で翻訳部門にノミネートされたがいずれも受賞を逃した過去がある。桐野の作品は非常に面白くて筆者も大好きな作品だが、以前に書いたのでここでは述べない。東野の作品は堤真一主演で映画化もされたが、犯罪の動機が目新しく、しかもリアリティを感じさせる点（両者がともに満たされることは滅多にない）には大いに感心させられた。

また、2016にはイギリス推理作家協会の「ダガー賞」翻訳部門で日本人としては初めて**横山秀夫**の『**64（ロクヨン）**』が最終候補にノミネートされた。これもかなり話題になった作品で映画化もされ、アピール度の高かった作品である。横山の作品は「警察小説」と呼ぶ人もおり、警察組織と捜査員たちを描くことにも力点がかかっており、もしかするとイギリスではこういうものの方が好まれるのかもしれない、などと思ったりした。日本の読者でも、これが肌に合うという人はかなりいるだろうと思う。

さらに**中村文則**という作家も海外で注目を集めている。彼は2005に『土の中の子供』で第133回芥川賞を受けたが、更に2010には、『**掏摸<スリ>**』で第4回大江健三郎賞を受賞。そして、その英訳『The Thief』が、ウォール・ストリート・ジャーナル紙の2012ベスト10小説に選ばれたのだ。また、翌年には『悪と仮面のルール』の英訳（『EVIL AND THE MASK』）がウォール・ストリート・ジャーナル紙の2013ベストミステリーの10作品に選出。それらにより2014には、ノワール（ハードボイルド）小説への貢献で、アメリカでデイビッド・グーディス賞を受賞した。中村はカミュやカフカの影響があるとも言われるが、試しに評価が高かった『掏摸』などを読んでみるのもよいのではないだろうか。